

ジャンヌ・ダルク

井村勝子 共著
白井詔子



ジャンヌ・ダルク

井村勝子 共著
白井詔子



女子バウイング

もくじ

- 1 フランシスの使しみ…………… 65
初巻の巻詞で 百年戦争 金女ロザンヌ
天啓のお告げ 思いがけない使節 王太子アンリ二世的な
ノ
- 2 光世に面会す…………… 63
ひらかれた道 見えず ぼろやぶりの数々劇々
白馬の騎士 オネロアンの少女 一四四九年五月七日
- 3 栄光の輝き…………… 113
フランスの道 蘭地式 くらまのり くらまのり
不正を裁明 判決 幾びたつた白ばら
- 解 題…………… 170

1
フランスの悲しみ



原丁画
田中横子

村を道われて



「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

た。

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

「一、今年冬に雪が降るかも知れない。」

です。

雪は、峠のカトリーマとジャンマの手を取ると、足はぐに裏の山口に向かって、ぐんぐん
「た。足のワキツツとジャンマをビエールは、足といっしょに、すでににける手は手をと
と外へ出ていきました。家の裏庭には、荷物をもとめた村の人たちが、あわただしく集まっ
てお話をしています。」

ジャンマの父、ジャック・デルタは、村の代表役をつとめているので、これまでもな
んどか、人びとを諭慰させる除障をとつてきたのです。

まあなく、父のできばえした除障に惚けて、人びとは、ひとかたまりになつて慰
しほした。

月も星も見えない真っ暗やみです。静まりかえったやみの中に、足音だけが、ふきふ
なほど大きくひびきます。それは、まるでアルゴニエ軍が、すくなくせまらして、い
ちやうど不安にかりたてたものでした。

人びとは静か、走り、また静かになりました。ジャンマの父が、避難場所として古い家
めにおいた、扉のとりでまでに行きます。

畏怖に迫りかけられるように、ここまでにけのびてきたものの、あとにこたえた村が、ア

今こそアルブリーニュ軍にあらされ、女になめつくされているのではなにかと思つと、思はず涙いたため息がもれるのでした。

「またいつか、おうちに帰れるの？」

ジャンヌは、なみだにうるんだひとみをあけて、母にたずねました。

「帰れるともジャンヌ、心配しないで、神さまが、もつとごまかして下さるよ。」

母はジャンヌの手をにぎりしめ、なみだにぬれたジャンヌのおおを、やさしくふいてくれました。

とりてには、たいまつがともされました。暗ら暗らと思しげにゆれるほのおの下に、身も寄あつて夜をあかしながら、ドムレとイの娘は、口々にアルブリーニュ軍への屈辱をおもまけるのでした。ドムレとイの領主は、ゴードリタールという皇太子の御軍隊でしたから、村の人びとが、皇太子の敵にあたるアルブリーニュ軍を、ひどくきらつていたのは、当然といえます。

「アルブリーニュのやつめ！ この手でひつつかまふて、キユーといわせてやりたいんだ！」

「そんなこと大声でいうもんじゃねえ、てむかいする者は、だれかれかまわず、殺してしまふやつだ。」

真の敵인 안드레씨는、あわててとめよつとしましたが、雄大膽に火がついたまぶらに、怒りは、次々にひろがっていきます。

「そうだ、そうだ、わしら百姓が、浮城たたらして馬車馬みでよに働いても、やれ税をおさめろ、穀物を出せ、と取り立てられる、そのうえ、アルブリーニュのやつらに、おしらの食べ半分までうばわれた日にや、どうしたらいいんだ！」

「おしらのように、まじめに大地をたがやしているもんが、なんでこんなバカをやるんや、けりやならぬんだ！ これもみんな、あのアルブリーニュのやつが、イザリスにこの国を焼つちまつたせいなんだ。」

「おしをよりあけて、はげしくいまいた人びとは、腕の中にもやもやしていた不満をはき出して、気がすんだのでしよう。とりでの中は、輝けしーんとなりました。すると、まぶらきの安드레씨가、ため息まじりに口をきりました。

「神さまは、わしごのことも、おみすてになつたんかねえ。」

「そんなことはねえ、こんな手前があるじゃねえか。」アランヌは、ひとりの女に

よとってほろび、ひとりの少女にまつて扱われる。」「とら、フランヌをほろびした女とは、
イサオオ女さまのことだといわれてゐるかね。」

「いったいそのもうひとりの『少女』と、この方は、どなたのことかぬ？」

「くわしくはおからんが、なんでも『おの娘』から出るという話だ。」

「とら、おしらの村にあるあの種かぬ？　このまをびんぼう村から出るもんかぬ、お
じいねえさんだ。」

「あつから、うすくまつて、じつと話を聞いていたひとりの若人が、急に、熱をおひ
た口調で語り出しました。かれは、遊藝民のひとりで、すっかりやせこけて、目ばかり
まよるまよるませています。」

「おし、その昔話を信じてとも、神さまは、おしらの願いを聞きとどけて、まつとフラ
ンスを解放してくださる。たとえおしは、敵と戦にしても、その昔話が實現することを
信じてゐるのだらう。」

「このことばにはげまされたように、中年の婦人が、口を開きました。彼女もやはり、
町からのがれてきたひとりでした。気品のある顔だちとやさしい声のひびきに、骨が耳
をかなむけました。

「わたたくし、それを信じております。夫も愚乎も戦争でうばわれ、家まで壊されて
しまつて、なんのあてもなく、このまでのがれてきたわたたくしです。人それぞれが
負つてゐる、はられたのもぎれるよふな思ひを、神さまだけは、底の底まで知つておら
れる、わたたくしはうしろ、ただそれだけおささへにして、生きてまいりました。」

「とら、おしでも、たびたび心の中に、はげしい怒りや、うらみや、悲しみが、わたたく
しをおしつおすように、おきあがつてまいります。そのよふな時、わたたくしは、あのお
かたのことを考へるのです。」

「とういつて、その婦人は、ちよつとことばをききました。ピヤンヌは、誰のかたから
にすわつて、まきほどからの村と女の会談に、じつと聞き入つていました。六歳のジャン
ヌには、まづわからぬながら、人びとの怒りや悲しみが、なんとはなしに心にせま
つてくるのでした。婦人は、また静かに語り始めました。

「わたたくしたちが信じたおかたは、おそろしい十字架にはりつけにされ、苦しんで、く
なられたではありませんか。何一つ悪いことなしてなかつたばかりか、自分をすてて、」